

# 奴隷の語りをめぐる声と文字の相克 : スレイブ・ナ ラティブからトニー・モリソンまで

峯, 真依子

<https://doi.org/10.15017/1670411>

---

出版情報 : 九州大学, 2016, 博士 (比較社会文化), 論文博士  
バージョン :  
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏名	峯 真依子			
論文名	奴隷の語りをめぐる声と文字の相克——スレイヴ・ナラティヴからトニ・モリスンまで			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	小谷 耕二
	副査	九州大学	教授	太田 好信
	副査	九州大学	教授	高橋 勤
	副査	愛知県立大学	教授	鶴殿 悦子
	副査	相愛大学	教授	山下 昇

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、アンテベラム期のスレイヴ・ナラティヴから現代のトニ・モリスンの作品に至るまでのアフリカン・アメリカン文学における声と文字の相克について考察したものである。

論文は二部構成となっており、まず「序論」で本研究の背景となる奴隷制度下での読み書き禁止法について概観し、声と文字に関する主要な先行研究を検討することで問題点の所在を明らかにしたあと、第Ⅰ部「声から文字への移行」では、第1章でアンテベラム期のスレイヴ・ナラティヴを、第2章ではニューディール期の連邦作家計画（FWP）において収集された元奴隷へのインタビューの聞き書きを取りあげ、それぞれのスレイヴ・ナラティヴの歴史的、社会的背景を丹念に記述し、その文学史的意義を検討している。その二つのスレイヴ・ナラティヴが後のアフリカン・アメリカン文学の声と文字の問題の起源となっており、同時に現代の作家たちが奴隷制度を黒人の立場から捉え直し、作家としての方法を確立するのに重要な役割を果たしたことを指摘している。

第Ⅱ部「文学における声のイメージーション」においては、現代のアフリカン・アメリカンの作家たちが、読み書きが禁止されていたからこそ育まれた声の語りの伝統を、作品のなかでどのように継承しているかを論じている。

第3章では、スレイヴ・ナラティヴそのものを作中に取りこんだとも言える、ラルフ・エリスンの『見えない人間』を祖上に載せ、この作品には、リテラシーの獲得による社会的上昇の動きと、声の語りによる民族的絆への下降の動きとのあいだの緊張関係が存在し、その緊張関係のなかで書くことと語ることの矛盾にとらわれた主人公が、最終的にはその矛盾を超越していく可能性が示唆されていると論じている。

第4章では、ネオ・スレイヴ・ナラティヴの範疇に属するアーネスト・J・ゲインズの『ミス・ジェイン・ピットマンの自伝』を取りあげ、それが、FWPスレイヴ・ナラティヴを利用することによって、奴隷の語りがあたかも音声として聞こえてくるような錯覚をもたらすテキストを目指しており、テキスト（文字）で声を表現するという矛盾に挑戦する試みであったことを明らかにしている。

第5章では、トニ・モリスンの『ソロモンの歌』に登場するたくさんのユニークな名前を手がかりとして、声と文字の問題に迫っている。黒人の名前は、文字文化のなかった奴隷制度の時代から彼らにとって最も短い豊かな口承の物語でもあり、ときにそれは記憶の保存、個々のアイデンティティの表現形式であった。ただ声のみによる保存には限界があり、名前の奥に秘められた個々の物語は紙に文字として記録されることでより確実に保存されることが示唆されている、と論じている。

第6章では、モリスンの『ビラヴィド』を取りあげ、そこに登場する肉体性を伴った亡霊ビラヴィドが、生者に過去を語らせ、歴史に記録されなかった声を回復させるための存在であったことを論じている。そして、声の語りにより甦った過去の体験が、大学をめざす、ビラヴィドの妹デンヴァーによって文字をとおして歴史として記録される可能性が暗示されていると指摘している。その一方で、ゆくえがわからなくなった亡霊は消滅してはならず、そのことは、文字の世界のかたわらに声の世界がひっそりと息づいていることを示しているとも述べている。

「結論」では論文全体をまとめたうえで、アフリカン・アメリカン文学においてはリテラシーこそが自由獲得への道であるという意味においてリテラシーにたいする信頼が存在する一方で、共同体の

絆に根ざした声の文化への信頼ももう一方に存在して、その両者がテキスト上でせめぎあっており、同時にその緊張関係のなかから声と文字が対立しながらも共振する稀有な文学が生まれてきたと結論している。

以上のように、本論文は、奴隷制度の時代のスレイヴ・ナラティブから現代の作品に至るまでという大きなパースペクティブのなかで、声と文字の相克の問題を論じている。声と文字という視点を切り口にすることにより、第一部のスレイヴ・ナラティブの歴史的研究が第Ⅱ部の文学テキストの分析に有機的に関連する形でうまく論じられている。とくに、従来歴史学や社会科学の研究対象とされることはあっても、文学研究の分野で取りあげられることがあまりなかった FWP スレイヴ・ナラティブを文学史的展望のもとに位置づけたことは、本論文の独自の成果であるといえる。巻数にして 40 巻にもおよぶ FWP スレイヴ・ナラティブを独自に分類、分析し、南北戦争前後の黒人のリテラシーの実態を実証的に明らかにしたばかりではなく、そこに見られる音声としての声が、現代の作家の作品にどう活かされているかを具体的に論じている点も長所といえよう。第Ⅱ部の作品論にも随所に興味深い独自の見解が呈示されている。歴史資料の扱い方にやや不備がみられ、またモリスン論の論述に若干厚みが欠けている部分があることを差し引いても、本論文はアフリカン・アメリカン文学研究に十分に貢献をなすものだと考えられる。よって、論文調査委員会は、本論文が博士（比較社会文化）の学位を授与するに値すると判断した。